

1. 授業のねらい・概要

「人格の発達状態に適した学習」「人格の発達を育む学習」の必要性を説き、発達及び学習と教育心理学について述べる。学校には健常児及び障害児、両者のボーダーライン部分に位置する子ども、現実には健康と病気の間を揺れ動く子どもが存在する。彼らが望ましい発達を遂げていくために必要かつ適切な揺さぶりとなる学習と指導について概説する。

本講義の受講者は、講義内容をもとに研鑽を積んで欲しい。さすれば、「健常児・障害児」における心身の発達や、ある内外の圧力に適した学習と指導の仕方を知得することができる。発達を促し育む幾つかの揺さぶりのかけ方を自己のものとすることもできよう。

2. 授業の進め方

講義。質疑応答の時間を設ける。

3. 授業計画

(1)本講義の意義と目的：①教育心理学と学習・発達論、 ②本講義のねらい (2)発達の概念、発達の原理 (3)発達段階：乳児期・幼児期・児童期・青年期・成人期・ 老年期 (4)心理面の発達①：精神的自立性の発達 (5)心理面の発達②：個人的価値体系の発達 (6)心理面の発達③：認知的発達 (7)学習理論、レディネス (8)動機づけ、教授－学習法 (9)評価 (10)研究方法 (11)指導上の留意点・健常児：①健常児とは、②乳児期・	幼児期における指導上の留意点 (12)指導上の留意点・健常児：③児童期・青年期における 指導上の留意点 (13)指導上の留意点・障害児：①障害児と教育、②視覚障 害児・聴覚障害児・知的障害児・肢体不自由児・言語 障害児・病弱児・自閉症スペクトラム障害児・情緒障 害児 (14)指導上の留意点・障害児：③学習障害児・注意欠陥／ 多動性障害児・重複障害児 (15)指導における留意点・“健常児－障害児”：①健常と障 害の境界に位置する子ども、②健常と障害の間を揺れ 動く子ども 全体のまとめ
---	--

4. 到達目標

講義の各回において取りあげる学習と指導についての知見を、自己のものとする。

5. 準備学修に必要な時間、またはそれに準じる程度の具体的な学修内容

シラバスや参考文献をもとに今回の講義内容を理解しようとの思いを抱いて講義に臨み、復習を確りと行なっておいて欲しい。

6. 成績評価の方法・基準

定期テストの結果を評価の対象とする。

7. テキスト・参考文献

①テキストは使用しない。

②参考文献を、次に示す。

○高野清純監修 川島一夫編 1991 図で読む心理学 発達 福村出版。○高野清純監修 新井国二郎編 1991 図で読む心理学 学習 福村出版。○永野重史/依田 明 共編 1976 教育心理学入門 新曜社。○牛島義友・坂本一郎・中野佐三・波多野寛治編 1973 教育心理学新辞典（三版）金子書房。ほか。

8. 受講上の留意事項

①4日以上の欠席者は定期試験の資格を失う。②講義に確りと参加して欲しい。